

The
SPECIAL
Real
INTERVIEW
Face

いま、働きものなんです

大桃美代子



心って、きっと
みぞおちのあたりにあるんですね。
哀しい時は、キュッっと痛くなるし
おかしい時は、笑いのマグマが
グ、グ、グ、グって上がってきますよね。

取材・文／あさかよしこ
写真／ハリー中西
協力／MBS 広報部



キツツイ、キツツイ!

「自分ではキャスターと言ってるんですけど、スタッフはそういうと笑うんですよ(笑)。だから……タレントなんでしょうかね。でも、今は何でもやっておくべきだと思います。」

澄んだ声と、笑顔の清潔な人である。

MBS「テレビのツボ」(屋台の目え)の二本の生番組で、ぜんじろう相手のユニークな司会がウケている彼女は、ただ今一週間のうち、月火水を大阪で、木金土日を東京でと、文字どおり東西を股に掛けた活躍ぶりを見せている。

「たいへんですけれども、その分楽しいんですよ。東京と大阪の違いっていうのもすごく感じますからね。ホラ、大阪の人達って全然悪気がなく、いいことも悪いこともセーブ言ってくれるじゃないですか。でも東京は悪いことはしまっておいて、あとでカゲ口言われるっていうのがあるんですよ。だから人間的には大阪の方がすごく好きですね。わかりやすいから。」

では大阪独特の口調は?

「キツツイ、キツツイ、もつ……」

(笑) キツツイよ、こりゃあ〜という感じですね。少し親しくなると、もつ、自分、おまえの世界ですからね。「明石家電視台」という番組で最初に大阪に来た時なんか、黄色い洋服を着ていると「黄色い服よう似合うなあ。」って言うってくれるから、ほめられたと思っ

て喜んで「そんなに黄色が似合うのは、アンタとバナナくらいや。」、緑色だったら「アンタと蛙ぐらいや。」なんてそういう表現で全部言われちゃうんです。これってバカにされてんのかしらって、けっこう悲しかったですよ(笑)。



それが大阪流の、親愛の情を表す手段だとわかってふっきされるまで、一年以上かかったという。

「今はもつ、ヒエ〜って怯まなくなつて、少しずつ言い返せるようになってたんです。それなら、今度は気が強いか言われるようになって気にしてるんです。例えば、こっちはアホっていうのが、愛情を持った言い方になるんですけど、東京ではバカじゃない、って言いますよね。そつ言つと、今度は私がキツツイって言われてしまうんです(笑)。」

そういう感覚の違い、ニユアンスの伝わり方の違いは、今でも苦労しています。」

言葉のひとつひとつが明確で表情豊か、しかもユ一モアを交えた端正な語り口からは、やはりキャスターとしての資質がうかがわれる。

NHKの「クイズ日本人の質問」の回答者など、東京での番組でも、彼女のそのキャラクターは、一時もてはやされたバラドルとは異なる、堅実な理性を感じさせてくれる。

「今、NHKの番組で司会

をしていらっしやる古館さんの研究をしてるんですよ(笑)。ほんとに不思議で魅力的な方なんです。」

大桃美代子……名前のイメージがそのまま本人にキレイに重なって

いく。

「本名なんです。イヤラシイ名前だなんて言われた事もありましたけど(笑)、ほめて下さった方もありましたし、覚えていたたくには、いい名前だと思います。」

新潟県生まれ。

彼女の幼い頃を思い浮かべると、遠い日の懐かしい童謡が聞こえてくる。

それは、深い雪に埋もれた窓から外を眺めながら「はあるよこい……」と春を待つ、ミイちゃんの歌声だったり、「あの子はたあれ」の隣のミイちゃんのつぶやきだったり……

「小さいころ、バカでした（笑）。小学校二年生くらいまでは、ほとんどサルのような子だったんですね。通知表なんか見ても、「ひとに咬みつかないように」とか「けんかしないでください」「落ち着きがない」……そんなことはっかりなんですよ。「読解力ががない」っていうのもありましたから、字も読めなかったんじゃないですか（笑）。その名残りが今もあるなあ（笑）」

それが三年生になって急変した。突然本を読むことに目覚めてしまうのである。図書館にある本はほとんど読破した。

「その時読んで得た知識で、今生きてるようなものです」

中学時代はテレビっ子、高校時代はクウタラ少女、短大では英文科を専攻。これにはちょっとしたワケがある。

「トム・クルーズにインタビューするのが夢だったんですよ。何かエサをぶらさげないとやらないタイプなんですわね。」トム・クルーズにはもう五、六年恋しっぱなしである。

短大卒業後、一旦〇し生活を送る。堅気の銀行員である。「ぞ」をやめて、二年くらいブータロウやってみましたね。その間は輸入業を手伝ったり、自分で人材派遣会社やってみたり、一時は株で食



べてたりしたんですけど、新聞片手にアッこれ来そうだなーなんて（笑）。バブリーな時代だったんですよ。そのころ知人の紹介で、TVの方も平行してやっていた、食べて行けるナ、と思ったのがそのTVの仕事だったんです」

今の事務所に所属して二年あまりになる。最初の仕事がフジTV「スーパータイム」のスポーツレポーター。続いてTBS朝のニュースのキャスター……やがて大阪の番組に進出。

「今いろいろ仕事が増えてきているのは、大阪のおかげですね。昔くうたらしていた私ですけど、働き出してから働き者になりました。今、すくく働いています。自分で考えてやっていたいかならない世界ですかね。」

そんなシンの強さは、もしかしたら雪国新潟生まれの血のせいなのだろうか。同じ新潟出身者には、樋口可南子、三田村邦彦、渡辺謙などがいる。

「ウーッ、そんなステキな方たちを例に出されたら困ってしま（笑）。私が育ったところは、三ヶ峠近くの山際の地域で、季節の変わり目がすくくハツキリしているんです。夏は暑く冬はすくく雪が深い。だからそんな中で、じつと耐える強さっていうのは、どこかに染み付いているでしょうね。根性あると思いますよ。それに、新潟の人には、一丁前根性っていうのがあって、何事も一丁前になって初めて人間と認めるっていう血が流れているらしいんですよ。なるほどなあって思いますね。でも私はまだまだ……」

今は、ダルマとニラメッコをしながら、自分に喝を入れる日々なのだそうである。

らそんな中で、じつと耐える強さっていうのは、どこかに染み付いているでしょうね。根性あると思いますよ。それに、新潟の人には、一丁前根性っていうのがあって、何事も一丁前になって初めて人間と認めるっていう血が流れているらしいんですよ。なるほどなあって思いますね。でも私はまだまだ……」

雪国 生まれの 一丁前根性



「私、サイエンスの番組をすくやりたいと思っています。科学と非科学みたいなことを考えるのが好きなんですけど、自然科学をつきつめていくと、けっこういわゆる精神世界の内容と似てたり、仏教やキリスト教で言っていることと似てたりするんですね。この接点を探る番組を作りたいと思って。」

もしかしたら神様はいるのかもしれない、彼女はそう思っている。けれども、宗教色や、心霊、オカルトを持ち出されると、うさぐさくさく拒否反応を起こしてしまう。あくまでも科学や心理学という学問のレベルで取り組みたいと。

「このころ、若い人たちの間でも、精神世界に興味のある人たちが増えているでしょう。絶対に、へんな方向にいったりはいけないと思うから。ただ番組としてやるには、時期的にどうかなくなっていうところが、難しいんですね。」

これからは、脳の解放や、心の存在が人間学・宇宙学のテーマになって行くだろうと彼女は考えている。

「これが解明されたら、すごいことになるだろうな。人間捨てたもんじゃなくなって思います。」

表情が生きてくると輝いてくる。考え方のスケールがここまで広がると思いきりふっきれた対話ができる。

例えば、心って、いったい人間の身体のとどこにあるのだろう……とか。

「ホント、どになんででしょうね。この辺、鳩尾（みぞおち）のあたりじゃないでしょうかね。悲しくなると、この辺がキューツと痛くなるし、おかしい時もここから、ググググって笑いのマグマが上がってきますよ（笑）。」

もうひとつ、仕事以外に興味を持っているものがある。「コンピューターなんです。そのうち、コンピューターを使ったマルチメディア中心の時代になっていくと思うので、すぐ対応できるように、一生懸命勉強してらんです。グラフィックとか音楽のアレンジというあたりから入って……」



今の彼女から発せられる、さらさらしたオーラのものは、この好奇心と行動力にあるらしい。少し気になるのは、恋をして結婚。

「結婚して、子供がいて、仕事を持って、というしなやかな女性って、すごく憧れちゃうんです。結婚はするつもりですけど、私は器用じゃないから、今はそれができないんですね。ひとつひとつ達成して行く中に、結婚もあるんだろうな。」

結婚しよと思ったことは？

「したいと漠然と思っていたというだけで、現実はこの人にとっていうのは無かったですね。別につきあつたことが無いっていうわけでは無いんですけど（笑）。縁があるかないか、みたいな事なんでしょうね。もしも結婚して、相手に今の仕事やめてくれて言われたら……なんか方法を変えてパッチワークなんかやるかもしれないし……チクチク、チクチク。とにかく何かやってみようね。ものを作るって、その課程が好きなんですよ。つくつく私、職人だなんて思いますよ。だから、職人さんと結婚したい（笑）。」

人間、捨てたもんじゃない

PROFILE

1965年 新潟県生まれ
 学歴 成徳学園短期大学卒
 身長 161cm 血液型A型

TV歴 「世界ふしぎ発見」「どうぶつ奇想天外!」「スーパータイム」「600ステーション」「痛快明石家電機台」「テレビのツボ」「痛台の目玉」「桂三枝のニュースコロムス」「金子信雄の楽しい夕食」「麻きももの木20世紀」「どーなるスコープ」「ウイス日本人の質問」「ウィヴィアン」

エッセイ集 5月刊行予定



MBSテレビ「層台の目玉」より



MBSテレビ「テレビのツボ」より

LADIES ONLY

LADIES ONLY



0120-194-054
 0120-194-198

TELEPHONE-CLUB

1年1組
 でんわ組

SubCall 075-822-1231

マリオのように ピョン、 ピョン

●●●●

笑って、怒って、悲しい顔して、アツカンペーして……カメラマンの立て続けの注文に、快くキビキビと応えてくれる。ただ今、京都「よるじや」の油とり紙を愛用中とのこと。

女優の仕事に、興味はあるのだろうか。

「もし話があれば、体験としてやってみたいとは思いますが、それはあくまでも自分にとって大きな目的のための枝葉であって、幹にはならない、そんな気がします。」

大きな目的……それは彼女の企画による科学番組の実現と、まもなく刊行される初のエッセイ集が多くの読者に読まれること。

「エッセイの方は、出版社の方に申しベンペンされながら何とか頑張ってますけど、TVの仕事のほうは、全く掛け離れたことをやってるんですね。でも今の私は「笑い」を求められているんだらうし、その「笑い」を覚えて何かがあるのかもしれないし、知ると知らないでは大きな違いがあると思うし、体験したものの勝ちつというところはありますよね。とにかく志を持ってれば、少しまわり道にしても、必ずたどり着くだろうって信じて……。」

それでもたまには、目的が見えなくなると、立ち止まってしまふ。そんな時には私ってナニ？と、自問自答する。

「時には後悔はしないんですけど、自分が目指している方向だけ見て、シュンシュンシュンって軌道修正するんです。」

つきはなして、客観的に自分が見える人なのだろう。



「見えてたらもつと売れてますよ(笑)。ただ、今仕事が全部なくなつたとしても、その時はその時っていうことはありますね。それなら外国へ行つて、英語ペラペラになって、向こうのCNNのキャスターやるのかな、考えたり。なんなのか、オマエーツ(笑)。」

大阪色のツツコミも、だいぶ板についてきた。それでも、番組にしがみつく事はしたくない、どうしても長く続けるためにという事だけ考えるようになってしまつたから。

「それはいい方法ではないですけどね。タレントとして、遊動円木の上で揺られて、また次の木にピョンと乗り移って、そこで揺られて、またピョンと乗り移って……そういうようなもんだと思ってるんです。マリオのような、ロールプレイングのような。」

それは、スリリングできつけれど、やり甲斐があることだといふ。

「この仕事は、アイドルとは違って、年齢が気にならない、結婚しなくても魅力的な人間になれるかって事にかかっていると思うんですね。もう若さでやっていけない年齢ですから、どれだけの人間かということも計られるわけですから。私は、特にキャラクターが強烈なわけじゃないし、一歩一歩しか進めない人間ですから、これからは勝負です。とりあえず、まずはエッセイですね(笑)。」